

「伊達市有珠4遺跡—近世アイヌ民族の墓の調査」

伊達市噴火湾文化研究所学芸員 青野 友哉

2007年12月15日に北海道大学で開催された北海道考古学会遺跡報告会での発表要旨に加筆修正したものを掲載します。

有珠4遺跡は、有珠優健学園跡地に養護老人ホームを建設するために、当研究所が事前に発掘調査したものです。2006、2007年の2カ年の調査では縄文時代中期(約4,000年前)から近代までの遺構と遺物が発見されました。

そのなかでも、23基もの近世アイヌ民族の墓がまとめて発見されたことは非常に珍しく、保存状態の良い人骨や副葬品の出土により、多くの考古学的情報を得ることができました。

今回は、発掘調査により明らかになった近世アイヌ文化期(本州は江戸時代:約400~140年前)の墓の構造と遺体の埋葬の仕方、性別による副葬品の違いなどについて紹介します。

さらに、約340年前の有珠のアイヌ民族が「墓地概念」を持っていた可能性が指摘できることから、明治時代以降の民俗学的な聞き取り調査ではわからなかった、近世アイヌ民族の死生観と他界観を考古学的に究明する必要があることを述べました。

■近世アイヌ墓の概要(時期・構造・人骨)

2カ年で約2,000㎡を調査した有珠4遺跡では、近世アイヌ文化期の墓が23基発見された。

墓の時期は17世紀に降った有珠山(1663年・Us-b)と駒ヶ岳(1640年・Ko-d)の2つの火山灰により3時期に区分できる。時期ごとに墓を集計すると表1のようになる。

2つの火山灰に挟まれたⅡ期の墓は、作られた年代が23年間に限定できるという極めて稀な例で、しかも、その数は10基もある。これらは今後、村の人口規模の把握や、血縁関係、婚姻関係など、村がどのように構成されていたのかを知る上で重要な資料となる。なぜならば、この10基の墓の被葬者どうしは実際に会ったことのある、あるいは

血のつながりのある人々である可能性が極めて高いからである。

墓の構造は、地面を長台形や小判形などに掘りくぼめ、掘った土を穴の周りにドーナツ状に積み上げた形である。遺体を入れた後に墓穴は埋め戻されるが、平坦になるように軽く土をかけた状態である。

また、遺体頭部側の墓穴外には直径約20cmの柱の穴が9基の墓から見つかっており、墓標が立っていた痕だと考えられる。

このドーナツ状に土を積み上げる構造と墓標の存在は、そこに人が埋葬されていることを生きている者が認識するための作り方といえる。

次に人骨と副葬品について記す。墓のほとんどには人骨が残っており、副葬品も伴っていた。人骨を形質人類学的に調べると、性別や年齢、生前に煩っていた病気や死因もわかることがある。これらの鑑定は現在、東京大学大学院理学系研究科(人類学教室)の近藤修准教授に依頼中である。

一方、考古学的には、副葬品の種類から性別を判断できる。田村俊之は千歳市末広遺跡で人骨と副葬品がともに残存している例から、男性と女性では副葬品の種類が違うことを示している(田村1983)。

これは墓とその埋葬行為が極めて文化的なものであり、規制にのっとって行われていることによる。つまり、「入れなければならないもの」、「やらなければいけないこと」などが決まっており、そのとおり行われなければ、死者にとっても生者にとっても不都合なこととなると考えていたということである。

これらを基に、今回の発掘調査では表2の出土遺物によって性別を判断した。その結果、男性14(うち幼児1)、女性8(うち幼児2)、不明1となった。

副葬品を見ると、中柄^{なつか}以外は主に本州で用いられ

表1 時期別の墓の数

時 期	遺 構 数
I期: 1640年以前	10基
Ⅱ期: 1640~1663年	10基
Ⅲ期: 1663年以降	2基

※1663年以前だがKo-d火山灰との関係が不明なもの1基あり

表2 男女による副葬品の種類の違い

男性用と判断したもの	エムシ(太刀) 中柄(弓矢の柄と矢尻をつなぐシャフト)
女性用と判断したもの	タマサイ(首飾り・ガラス玉・銭・銅鏡) 鉄製針・ナタ・カマ・鉄鍋
男女共用	マキリ(小刀)・ニンカリ(耳環)・ キセリ(煙管)・漆盆・漆椀

ていたもの、あるいは当時のアイヌ民族の好みに合わせて本州で作られたものである。彼らが宝物と考えたものや日用品の大半が、交易で入手したものであることがわかる。それと同時に、死後の世界、あるいはその世界へ行くまでの間も、生前使用していた道具が必要であると考えていたことがわかる。

■木棺・木槨の痕跡が確認できた墓（20号墓）

今回の調査で最も特筆すべきことは木棺・木槨構造の痕跡の発見である。これは木棺（木製の棺）、あるいは木槨（土中の穴に遺体を入れる部分だけ木製の板で囲った構造）を用いた墓の存在を示している。これまでも、余市町大川遺跡迂回路地点P-41号墓で2.8×2.8mの範囲でクリの板材が組み合わされて出土した例がある。ただし、今回の例は墓坑内が「緑色堆積物」（現在分析中の粘土ないしは火山灰）で満たされていたため、人骨と副葬品の残りが良く、埋葬時の状況が復元可能という点が特筆される。

この20号墓は緑色堆積物中に幅約1cmの黒色土のラインが長台形に囲むように見られた（写真1）。

長台形の内部にも緑色堆積物は存在し、掘り下げると肋骨が立体的に残るほど状態のよい人骨が出土した（写真2）。このことから、長台形のラインは木棺あるいは木槨構造の壁面であり、腐食して黒色土に置き換わったと考えられる。その規模は、長軸175cm、長辺（頭側）53cm、短辺（足側）32cm、高さ18cmである。底板の痕跡は確認できなかったが、蓋の痕跡は断面で観察できた。蓋は陥没し、屈曲したものと思われる（写真3）。

墓穴は、木棺・木槨構造の外側（人骨の右腕側）に幅17cmの拡張部分を持っており、ここに漆碗・漆盆・エムシが副葬されている。しかも、漆碗は漆膜だけでありながら、半球状を保っており、漆盆も縦に入れられた状態のまま、縁まで立体的に遺存していた（写真4）。これは副葬品が、半固形状の緑色堆積物で隙間なく充填されていたためと思われる。

なお、蓋の陥没具合から判断して、緑色堆積物は、本来蓋の上や拡張部に流し込まれたものであり、木棺・木槨構造の内側へは隙間から偶然入り込んだ可能性が考えられる。偶然入り込んだことで板の痕跡が残り、木棺・木槨構造の存在が明らかになったの

である。ということは、痕跡が消えている墓穴が他にもあるということでもある。それらを見つけ出す方法を考えてみた。

■なぜ口が開いているのか？

人骨の出土状態を観察すると、口が開いているもの（写真5・6・8）と閉じているもの（写真2）があることがわかる。奈良貴史（国際医療福祉大学准教授）は遺体が白骨化するまでの環境の違いにより、人骨が移動する程度に違いが生じるとしている（奈良2007）。

遺体に直接土をかけた「充填環境」では、腱や靭帯といった軟部組織が腐敗しても、その部分が土に置き換わるために骨の移動が少ないが、棺の中や石室に置かれただけの「空隙環境」では軟部組織の腐敗により骨が動いてしまうという。空隙環境で動きやすい部位は、主に下顎骨・胸郭・背骨・寛骨（骨盤）・股関節・膝蓋



木棺・木槨の痕跡が確認できた墓〔有珠4遺跡20号墓〕

写真1（左上）：木棺・木槨の痕跡

写真2（右上）：充填環境の人骨と副葬品、

写真3（左下）：蓋の痕跡（斜めの黒いライン）

写真4（右下）：充填環境に残った漆盆と漆碗